

「こだわり住宅」最新案内。リノベ、名作建築、コーポラティブ、ニ拠点居住 etc.

ELLE DÉCOR

ル・コルビュジエが
最後に愛した
パリの自宅を
特別公開!

AN
World's Leading
& Lifestyle Magazine

掲載

オオキ
「ドノオンド」

明
「ベルホネンの
葉・物の木」

日本と世界で見つけた、理想の家と暮らし方

これからの住居。

前川國男の自邸から田根 剛の最新作まで
スタイルのある住まい探訪

5人のプロが住宅実例を解説!
最強リノベーションを叶える
インテリアの法則

ROMAN & WILLIAMS
GREEN FINGERS 川本 倫
YAECA 井出 崇子 ほか

ミッフィーと出会うオランダの旅

2015・16秋冬コレクションから探る
ファッション×インテリアの最前線

My Home, My Style

エル・デコ
no.140 October 2015



みんなの次世代型ハウスを大公開！

これからの住居。

住居は大きく変わってきています。

建築家との家作りか、理想の間取りやデザインか。

あり方に大切なことはそれだけではありません。

紹介する家には、いずれも「自分らしさ」のある

を自邸に求めたオーナーがいました。

完成したのは、自分たちのライフスタイルを緩やかに包み込む家。

ではこれからどう暮らすのか、さまざまな実例からヒントを探ってみました。

ROTAHA HASHIMOTO





01

気鋭建築家の家に住む
田根 剛

02

名作建築に住む
前川國男

03

二拠点に住む
木村 顕

04

コーポラティブに住む
西田 司

05

リノベーションに住む
納谷 学+納谷 新

田根剛(GDT)さん設計の「A HOUSE for OISO」。住み手の加藤さやかさんとともに、100年残る家を目指して作り上げた。

ツクスの配置によって
独特のリズム

1階の屋根に乗って建物全体を見渡す
徹底的な形状がよくわかる。左ページ 玄
すぐの土間は、大きな窓から明るい日差し
的なスペース。ここは住み手の加瀬さや
まむオーガニックフレイバーティー「TE
のショップを兼ねており、いずれはこの対
ターやシエルフなどを設ける予定。キャビネ
は、グリーンやインテリア小物に交じって、
型が飾られている。



A HOUSE for OISO
所在地 ● 神奈川県大磯市
家族構成 ● 夫婦+子供3人
敷地面積 ● 168.75㎡
延床面積 ● 119.72㎡
1F ● 80.92㎡
2F ● 38.80㎡



01

気鋭建築家の家に住む

[A HOUSE for OISO] 設計/DGT. 田根 剛

今いちばん注目の建築家と作った 洞窟のような居心地の家

次々と話題のプロジェクトを手がける、気鋭の建築家・田根剛さんの最新作が大機に完成した。住み手が求めたイメージは、「昔からここにあって、この先もずっとここにある家」。果たして田根さんはどんな答えを提案したのだろうか？

photos : HIROTAKA HASHIMOTO text : HISASHI IKAI

に住む



フレーバーティーブランド
TE HANDELを主宰する住み手

住み手の加瀬さやかさんは、留学先のスウェーデンで田根明さんと出会い、それ以来の友人。現在、フレーバーティーのブランドTE HANDEL (テ・ハンデル)を展開している。有機栽培の茶葉と季節ごとの花やフルーツなどスウェーデンでブレンドしたものを輸入し販売。新しい住居を構えたことをきっかけに、自宅でもショップを運営していく予定だ。
<http://www.tehandel.com>



にあったもの”が
家を作る

あるバスルーム。「子供なので、プライバシーよりもしよつかないと加瀬さん。用いて製作したキッチンカに立つ加瀬さん。「田根来の友人。家のあり方に語り合えたことが楽しかった。リビングの片隅に置かれたブル。家具はすべてスウラ持っていたものをそのまま。リトグラフは鹿児島鹿野地地のいもはん奥にある和くし、落ち着いた印象に。特にお気に入りだそう。



「建築家は住み手の夢を支えながら、自由に設計することができません。しかし、もっと遠い未来を見据え、その家がどんな街並みや環境を育むのかを考えることができれば、その土地に暮らし続ける意志を示す家に

意味するのだと理解しました」
田根さんは、基礎工事のために土地から掘り起こした土を内壁、外壁の素材として再利用。赤みがかった独特のテイストの茶色い土壁はこの家特有の印象を訪れたものに与えると同時に、どこなく懐かしさを感じさせるものになっている。

「前の時代からここに立っていて、これからもここにあり続けるような家を意味するのだと理解しました」

家の中を自由に舞う、大磯の光と風



素材を生かして仕上げた環境になじむディテール

1.左官で仕上げた階段の上がり口。床と同じ素材から成り、肌触りがいいので、思わず裸足で過ごしたくなる。2.寝室と書斎がある2階。ワンルームを家具だけで仕切っている。整理ダンスは加瀬さんの祖母や母の嫁入り道具。加瀬さんの留学時代の友人のひとり、須長植さんのローテーブルやデスクは、以前から持っていたもの。窓を高くしたことで、遠転ぶと空が切り取られたように見える。



この地で生きていくための100年後に残る家。

26歳の若さでエストニア国立博物館のコンペで優勝、ミラノ・サローネでのシチズンのインスタレーションや新国立競技場のコンペ案でも注目された建築家・田根剛さん(DGT)。彼の初となる住宅作品が神奈川県大磯に完成した。美しい海辺と内陸の豊かな山の間、なだらかな丘陵の中腹にこの家は立つ。

「この地で感じた、山から吹き下りる風がすごく気持ちよくて」と話すのは、オーナーの加瀬さやかさん。土地を探し続け7年、やっとこの場所に出会い、まっ先に相談を持ちかけたのが、スウェーデンに留学時代からの友人の田根さんだった。

「何の脈絡もなく開発が進む土地が多いなか、大磯は500年以上前に縄文人が住み着いた痕跡を現代に残すエリア。歴史を遡りながら文脈を理解し、敬意をもって価値を認識して、はじめてその土地を引き継ぐことができる」と田根さんは語る。「場所には記憶がある」と続ける彼の建築哲学と加瀬さんの想いがびつたりと合致。4つのボックスの上に、木造の小屋が載ったような家の形は、大磯の風と光を家の中に取り込む仕掛けでもある。

1階は、ボックスの間に生まれる隙間に庭が入り込み、ガラス窓越しに庭の緑が風にそよぐ様子がうかがえる。一方、2階は建家の形をそのままに残し、天井のエッジに細いアールをつけたワンルーム。高い位置に設けた開口部が、山並みや大磯の青い空を美しく切り取る。

「100年後まで残る家にしては